第 60 回（一社）比較統合医療学会学術大会
第 20 回日本補完代替医療学会学術集会
一般講演 42

犬のストレス誘発性異常行動に抑肝散が奏効した 2 例
―CQ から RQ へ―

Two cases in which Yokukansan responded to stress induced abnormal behavior in dogs - from CQ to RQ

飯島　治
Osamu T. IIJIMA
（一社）比較統合医療学会漢方分科会
バウワウ動物クリニック
SCIM Kampo Subcommittee
bowwow veterinary clinic

漢方分科会では、獣医学領域における漢方の文献を収集しデータベース化して、誰でも簡単に「疾患・処方別にどれだけ研究･報告がなされているか否か」を知ることができるようにしてきた。

抑肝散は、近年ヒトの認知症の周辺症状に対する効果が注目され、広く応用されるようになってきており、獣医臨床においても同様の効果が期待されるものの、具体的な症例報告は殆どなされていない。

今回、抑肝散の抗ストレス作用に注目し、犬におけるストレス誘発性異常行動に試用したところ、以下の所見を得た。

症例 1：Mix（トイ・プードル×マルチーズ）、去勢オス、4 才、体重 2.9 kg。
主訴：特定の苦手なヒトが近づくと、体全体がこわばり動けなくなってしまう。飼い主は体を擦り言葉をかけてやるが、この状態は通常 5 分程続く。
処方：ツムラ抑肝散 0.625 g（1/4 包）BID。
経過：投薬開始後 5 日程で上記症状が出なくなった。投薬中は症状が出なかったが、休薬すると 2-3 日で症状が出てしまった。これを数回繰り返したので、現在は投薬を続けている。

症例 2：トイ・プードル、オス、7 才、体重 4.3 kg。
主訴：小さな子どもと同居するようになってから、両前枝を執拗に舐める行動が現れた。また口が届く範囲の毛をむしるようになり､毛が抜けてしまった。
処方：ツムラ抑肝散 0.625 g（1/4 包）BID。
経過：投与開始後 5 日目から行動に変化が出始め、両前枝の舐める行動は殆ど見られなくなった。毛をむしる行動は消失した。休薬すると 2 日程で両行動は元に戻ってしまったので、現在は投薬を続けている。

本報告ではこれら 2 症例を素材とし、獣医学領域の漢方の応用方法として、日常診療における疑問、即ちクリニカル・クエスチョン（CQ）の立て方と、その後の展開方法、即ちリサーチ・クエスチョン（RQ）への変換に至る道筋等に関して論じる。